

# 魁としての大奮闘の記録

会社が社員を教育して人材を揃え、将来に備えなければならぬ段階に来ているのに、金儲けと目先の損得しか頭にない社長の何と多いことか。この原始的企業家精神から頭上の二つの節目をこえて成長する経営者は少ない。節目をこえて大器となった一人の社長の大奮闘の記録を書きあげた。

経営管理講座  
染谷和巳 420

## 実在の人物の伝記を書く機会

経営者研修の課題に「私の人生史作成」がある。三十代のまだ「これから」の人も書く。生まれてから今までの記憶をたどり、アルバムを開き、手紙や文書を調べ、父母兄弟や友人などに取材して書いて行く。自分がどんな人間か、何が優れているか、何が劣っているか、好き嫌いの感情が人生にどれほどの影響を与えているか、今の自分の価値観（ものの見方考え方）がどのようにして形成されてきたかが解る。自分の成長に多くの人が深く強く関わっていたことに気づかされる。学校の先生の一言が与えた影響の大きさに驚く。「忘れかけていた人もいるが、こんなにも多くの人が私の人生に関わっていたんだ。この人たちのおかげで今の自分がある」と感動する。謙虚になる。人として器がひとまわり大きくなる。

講師は「格好つけてきれいなこと」を書いて人生史にはなりません。失敗や秘密、人に言えない恥ずかしいことも、この機会に書いてみましょう。こうした場合が自分の人生にどんな影響を与えたかがよく解ります」と説明する。大半の研修生は隠しておきたい恥は書かない。書かないが、この時こういうことがあったと文章の間にもその記憶を入れる。それでいい。何もかも明るみに出すことはない。自分を知らることができ、まわりの人を尊重するようになり、将来の指針になるなら「人生史作成」は成功である。この人生史は人に見せるものではない。一〇〇%自分ひとりのためのものである。人に見せるための人生史がある。成功者の自叙伝や回想録がそれである。伝記もこれに含まれる。興味がある人のものは買って読む。興味のない人のものは読む気になれない。自分がどんなに優秀かの自慢話に終始するものが少なくないが、この類の人生史はおもしろくない。

文章がよくないのが主因である。文章がよければ引き込まれて、自慢話が成功のドラマになる。書き手の文章力が決め手である。小説ではなく、実在の人物を主人公とした人生史に近い物語、これは伝記の範疇に属するだろう。読んでおもしろい伝記。城山三郎が得意とする分野である。昭和五十六年、初めての本「管理者の人間学」を出した。それを讀んだ師匠の佐藤編集長が「君は城山三郎くらい力がある」と励ましてくれた。以来、自分は城山三郎なみ、という自信ができた。かつて「統率力で人は動く」(フ

レジデント社)の中で五人の異色経営者の成功譚を書いたことがある。しかし一人の人の一生の伝記は一度も経験がない。昨年、自分の力を実証する格好の機会が訪れた。過去に二度人生史作成を会社で請け負ったことがある。島山と酒井が担当し、私は執筆しなかった。今回は自分が書く！

## 「おみじゅうと言いつてくれたが

十一月号の酒井正子の「もうひとつの夏」の最後に「第三者の人生を物語にする。こんな危ない仕事に主宰は精魂傾けた。この夏、私はそれを見届けた」とある。昨年の七月八月、九月に入っても猛暑、酷暑をこえた爆暑の日が続いた。毎年夏は筆が進む。暑いと頭も熱くなるのか、記憶の古漬けが表面に浮かんでくる。前に讀んだ本の一節が出てくる。忘れていた人の顔や名前が出てくる。頭の中も汗をかくのか。体から汗が吹き出るように脳からもじみ出ているような気がする。作家ではないが二十冊以上本を出している。ほとんどが夏にワーツと集中して書いたものである。酒井の「精魂傾けて」は当たっていない。夏、脳みそが汗をかく変な習性を持つている人間であり、責任と義務感から悲壮になつているわけではない。私の場合は脳汗を文章に変えているだけで、精魂傾けているわけではない。年の瀬に「佐々木大八伝 魁」を(株)サン・アシートに納本することができた。

十一月号の酒井正子の「もうひとつの夏」の最後に「第三者の人生を物語にする。こんな危ない仕事に主宰は精魂傾けた。この夏、私はそれを見届けた」とある。昨年の七月八月、九月に入っても猛暑、酷暑をこえた爆暑の日が続いた。毎年夏は筆が進む。暑いと頭も熱くなるのか、記憶の古漬けが表面に浮かんでくる。前に讀んだ本の一節が出てくる。忘れていた人の顔や名前が出てくる。頭の中も汗をかくのか。体から汗が吹き出るように脳からもじみ出ているような気がする。作家ではないが二十冊以上本を出している。ほとんどが夏にワーツと集中して書いたものである。酒井の「精魂傾けて」は当たっていない。夏、脳みそが汗をかく変な習性を持つている人間であり、責任と義務感から悲壮になつているわけではない。私の場合は脳汗を文章に変えているだけで、精魂傾けているわけではない。年の瀬に「佐々木大八伝 魁」を(株)サン・アシートに納本することができた。

「実名を出さないで」と言っている。一章の出だしはこうである。◇◇◇このままでは会社が潰れると思った。朝の六時。庭の朝顔が咲き始めている。紫色の大輪の花だ。佐々木大八は床の間の和泉守兼定を見た。打粉をして袴に納めたばかりである。ずっしり重い。それを持って家を出た。もう一年以上になる。今日で何回目の「団交」になるだろう。(中略)事務所に入ると女性社員が「おはようございます」と明るい声で挨拶した。いつも六時に来る社長が九時を過ぎても見えないので心配していた。それが姿を見せたので「ああ、よかった」とほっとし固まった。

誰が読んでもおもしろい評伝  
会長は全文を讀んで、うそや誇張のない文章であること、登場人物の誰も傷つけない文章であること、そして主人公の自分をほめることに評価している評伝であること、それを理解した。それにより「これは実名で出しても問題ない」と当初の考えを撤回してくれた。原稿の校正は万全を期した。今回は佐々木会長、石坂社長、私、酒井の他に島山顧問と島山に校正を教わった坂口部長、正木課長にまで参加してもらった。闘病中の島山は「こんな状態なので校正はできない」と断つたが、遅れて赤を入れた原稿を送ってきた。凌ぎを削るが鑄を削るに直してある。全員が見逃していた間違いを指摘してくれた。かくて目をこらしてもミスを見つけないことができないピカピカの本になった。

たえば二章の末に「大八は少年期を送った」とある。これは評伝の書き方である。評伝の文章の責任は著者であり、主人公には一切ない。て声が弾んだのだった。社長は二階の食堂へ階段を蹴った。会議室兼夜の宴会会場兼朝の社員食堂。朝食をとらずに出社する社員が多いので、近所のおばさんに賄いを頼んで簡単な和食を一食百円で提供している。社長以外は全員よく利用している。引き戸をガラツと開けた。ただひとりの味方、経営者側の住安専務が頭を下げた。奥にいた十人が一斉に見た。社長は入口近くの椅子にかけて日本刀を床にドンと突いた。「おいっ！」と叫んだ。社長が鬼の形相で刀の柄を握っている。十人の社員は石のごとく固まった。